

羣書備攷

九

			一八六三	和書門類
二	一	五	六	
三	二	一	三	
冊	架	函	號	類

內閣文庫			
		一八六三	和書類
三	二	二	
八	二	三	
函	架	冊	號

類抄

內閣文庫	
番號	和 18663
冊數	23 ( 12 )
函號	218 76





厚年書備名卷之九

永佃抄

中務隨筆後集永佃抄

東抄

平島抄



淺草文庫

自註二高令厚年

日書年自抄抄の作名大納言の信西の嫡子高井年  
相の及之是と此平島と赤坂及信源と年  
の及之是と此平島と赤坂及信源と年  
おの及之是と此平島と赤坂及信源と年  
の及之是と此平島と赤坂及信源と年  
の及之是と此平島と赤坂及信源と年  
の及之是と此平島と赤坂及信源と年  
の及之是と此平島と赤坂及信源と年  
の及之是と此平島と赤坂及信源と年  
の及之是と此平島と赤坂及信源と年

①

長山金才元先中納言の作治の事海師と其の子  
芳地の執行七何言律師兼田守の子中納言法  
印郭克小舟人小三と四本々々小舟何言の法信  
向の子息云用法仰人作上中下三巻の  
山小舟の法信我流の印字小舟出  
美々三并字小舟の事小舟の事  
三々三巻小舟の性舟並并指法の宗法小舟  
将当流の事小舟の事小舟の事三巻小舟  
言之教小舟の事小舟の事小舟の事  
不出行其流法性寺殿飛舎舎小舟の事  
之法性寺殿の法性寺殿の事  
言殿小舟の子息内七何師兼之節字流の事

高野山無山寺五代集卷之三

無山集三卷

秋彦春撰

高野山無山寺五代集卷之三  
相承宿願徳信才北集山法細尋常官所多事而有律律  
力如深文遠贈美人口矣其所述作各積三教百平哉然  
而如四代先徳微言北集度局者甚歌矣奉無由言求  
向在三身五廿遺稿而住歲臨餘所得為且歌許萬言余  
先徧録成三卷有八卷名無山集刊行之序三

掌平集

在原掌平撰

二 雅記秋契三今三平六奇仁山掌平集三

信々々々々々々々々々

講述抄

山本内命撰

和字并釋義云云出は延任の御代卷の講述抄  
越前の上平内命撰の講述抄  
越前の上平内命撰の講述抄

清献遺言

浅見孝正撰

日蓮三法見字正清献遺言の御代卷の講述抄  
美多の春秋意味の御代卷の講述抄

内珠径

日蓮三法見字正清献遺言の御代卷の講述抄  
美多の春秋意味の御代卷の講述抄  
内珠径の御代卷の講述抄

日蓮三法見字正清献遺言の御代卷の講述抄  
美多の春秋意味の御代卷の講述抄  
内珠径の御代卷の講述抄

故万葉集

日蓮三法見字正清献遺言の御代卷の講述抄  
美多の春秋意味の御代卷の講述抄  
内珠径の御代卷の講述抄

尚

三

才玉韻餘音浮々々々 海内小滿 注神貞主任集  
神代卷 後世集仲雄玉文章秀素奇々々々  
神代卷 後世集仲雄玉文章秀素奇々々々  
神代卷 後世集仲雄玉文章秀素奇々々々  
神代卷 後世集仲雄玉文章秀素奇々々々  
神代卷 後世集仲雄玉文章秀素奇々々々  
神代卷 後世集仲雄玉文章秀素奇々々々  
神代卷 後世集仲雄玉文章秀素奇々々々  
神代卷 後世集仲雄玉文章秀素奇々々々  
神代卷 後世集仲雄玉文章秀素奇々々々  
神代卷 後世集仲雄玉文章秀素奇々々々

古今集  
神代卷

古今集 神代卷 後世集仲雄玉文章秀素奇々々々  
古今集 神代卷 後世集仲雄玉文章秀素奇々々々  
古今集 神代卷 後世集仲雄玉文章秀素奇々々々  
古今集 神代卷 後世集仲雄玉文章秀素奇々々々  
古今集 神代卷 後世集仲雄玉文章秀素奇々々々  
古今集 神代卷 後世集仲雄玉文章秀素奇々々々  
古今集 神代卷 後世集仲雄玉文章秀素奇々々々  
古今集 神代卷 後世集仲雄玉文章秀素奇々々々  
古今集 神代卷 後世集仲雄玉文章秀素奇々々々  
古今集 神代卷 後世集仲雄玉文章秀素奇々々々

古今集 神代卷 後世集仲雄玉文章秀素奇々々々  
古今集 神代卷 後世集仲雄玉文章秀素奇々々々  
古今集 神代卷 後世集仲雄玉文章秀素奇々々々  
古今集 神代卷 後世集仲雄玉文章秀素奇々々々  
古今集 神代卷 後世集仲雄玉文章秀素奇々々々  
古今集 神代卷 後世集仲雄玉文章秀素奇々々々  
古今集 神代卷 後世集仲雄玉文章秀素奇々々々  
古今集 神代卷 後世集仲雄玉文章秀素奇々々々  
古今集 神代卷 後世集仲雄玉文章秀素奇々々々  
古今集 神代卷 後世集仲雄玉文章秀素奇々々々

秋實彦松

秋實彦松

秋實彦松 秋實彦松 秋實彦松 秋實彦松  
秋實彦松 秋實彦松 秋實彦松 秋實彦松  
秋實彦松 秋實彦松 秋實彦松 秋實彦松  
秋實彦松 秋實彦松 秋實彦松 秋實彦松  
秋實彦松 秋實彦松 秋實彦松 秋實彦松  
秋實彦松 秋實彦松 秋實彦松 秋實彦松  
秋實彦松 秋實彦松 秋實彦松 秋實彦松  
秋實彦松 秋實彦松 秋實彦松 秋實彦松  
秋實彦松 秋實彦松 秋實彦松 秋實彦松  
秋實彦松 秋實彦松 秋實彦松 秋實彦松

本朝通鑑

永井九八撰

日本書紀本朝通鑑の旨府にありて日本史の影を録す  
心算に世人の心算にありて日本史の影を録す  
名孝天皇の御代にありて日本史の影を録す  
あゝ其間扶桑夏記日本紀卷百餘枚玉海玉璽  
本朝世記日次記ありて日本史の影を録す  
自中平人ありて日本史の影を録す  
朝通記卷百四巻名是し日本史の影を録す  
日本書紀九八文書ありて日本史の影を録す  
日本書紀文字の類例のいかにあるの所請所置  
地所段野のいかにあるの所請所置  
日本書紀のいかにあるの所請所置

角一假字書一ありて日本史の影を録す

本朝世記

カ何言通鑑撰

日本書紀本朝通鑑撰本朝世記の希代の珍書也六國の  
あゝ七國の珍書也  
日本書紀の珍書也  
日本書紀の珍書也

律

金玉草半抄

令

令集解

令裁解

二

今抄

類聚三式格

延喜式

貞永令

建武令

元和令

伏

曰書之律令格式ハ國事ノ治シムル大宝也我ハ律令  
唐永徽律中刑部編也律ノ律令ハ  
多クハ古シク傳ヘル中平章佐金玉等ノ抄  
ノ今ハ傳ヘル事少ク中平章ノ抄書也先身ハ實侯  
細石傳ノ書ニ傳ヘルハ文德先生ノ抄也  
享保中ハ玉子ノ抄上ニシテ今ハ度ノ用也

六

今ノ類聚ニ編リテ此ノ書ノ本書ハ律令ノ  
先推宗ノ貞永ノ身御三十七卷清原夏村義幹  
ノ卷後原兼良抄教卷後格ハ弘仁格也延喜格  
ハ部抄也類聚三式格三十一卷是リ三年之令  
今ハ三卷後ニシテ或ハ延喜式全部五十一卷あり大凡  
書ハ多クシテ此ノ書ノ法也最  
ニテ今ノ例也平泰時貞永令ハ元部書  
因ニ法式トシテ律令傳士清原教隆  
鎌倉ニ招ク律法ノ文章ハ取  
トシテ中平章抄トシテ玉子  
ノ今ハ新ノ法度書トシテ  
今ハ建武令ハ定旨ト稱スル也



予の文章は是れ拙き地也元和令の清東宣賢と梅  
道春との取手也是又鎌倉の化法なり宣賢  
の拙きものなり

東音譜二卷

新井居美批

日本書紀一巻白石先生所著也我國の文字の未嘗  
ありしものなり

天書

日本書紀の天書は今傳ふ事ハ偽撰也

扶桑略記

本朝月令

華島餘情

日本書紀扶桑略記二通あり本朝月令二通あり華  
島餘情二通あり本朝書紀二通あり詳平年也  
國文実録

日本書紀五史美稱の世不行し書ハ略年也凡我國初年  
の詳是なり

日本書紀

日本書紀五史美稱の世不行し書ハ略年也凡我國初年  
の詳是なり

七

三史実録

之書

日書日本三代実録板行書院向大...  
書...  
...

日本元元決

正部正通撰

講述抄

二年應延撰

日本元元決

藤原兼良撰

日本元元決

松下見林撰

日書正部正通日本元元決...  
の書...  
...

の才子の日記は、その中に、  
 大和姫世記の原上下巻あり。今の人の下巻あり。  
 今書は、その中に、  
 大和姫世記の原上下巻あり。今の人の下巻あり。

大和姫世記

大和姫世記の原上下巻あり。今の人の下巻あり。

今書は、その中に、

日本史略

日本史略は、その中に、  
 大和姫世記の原上下巻あり。今の人の下巻あり。  
 今書は、その中に、

楠正成親并巻

楠正成親并巻は、その中に、  
 大和姫世記の原上下巻あり。今の人の下巻あり。  
 今書は、その中に、

文徳実録

文徳実録は、その中に、  
 大和姫世記の原上下巻あり。今の人の下巻あり。  
 今書は、その中に、

今昔物語

九



凡此... 四戸の吟... 子... 也

通俗元明年談

同寫後三撰

同書... 元明... 年談... 故世間... 通俗書... 題... 也

說法明眼論

同書... 說法明眼論... 聖德太子... 作也... 今朝書目

崔堅稿

僧絶海撰

同書... 僧絶海撰... 崔堅稿... 崔堅... 雅摩在

東鑑

同書... 東鑑... 鍾念翁... 其文... 也... 增... 也... 文... 也

弘仁式

貞觀式

延喜式

同書... 弘仁式... 貞觀式... 延喜式... 也... 也... 也... 也

偽  
七

偽



あつた書に... 御書に...

八幡宮御書

御書に八幡宮御書... 御書に...

日蓮御書

日蓮御書... 御書に...

御書に... 御書に... 御書に...

薩州府志

二城名勝志





海... 乃... 先... 之... 形... 列... 乃...  
白石泥版の失...  
唐老韻鏡

秋文雄拙

羊... 莊... 藏... 韻... 秋... 文... 雄... 拙...  
三... 之... 文... 雄... 上... 人... 往... 年... 著... 唐... 老... 韻...  
鏡

萬國全圖

江... 國... 談... 趙... 泰... 三... 青... 坪... 曰... 大... 西... 洋... 是... 西... 域... 國... 名... 歐... 羅... 巴... 意... 多... 紀...  
五... 等... 國... 在... 何... 方... 耶... 白... 石... 曰... 貴... 邦... 無... 萬... 國... 全... 圖... 耶... 南...  
國... 曰... 有... 古... 今... 而... 此... 等... 國... 多... 不... 載... 白... 石... 曰... 西... 洋... 昔... 去... 天... 三...  
國... 橋... 且... 萬... 里... 有... 所... 謂... 大... 西... 洋... 僕... 家... 藏... 有... 圖... 一... 本... 可... 以...

滿... 觀... 覽... 焉... 南... 國... 曰... 星... 日... 有... 所... 謂... 母... 性... 一... 白... 石... 曰... 貴... 邦...  
其... 地... 亦... 載... 以... 本... 邦... 俗... 字... 諸... 君... 難... 辨... 其... 間... 義... 在... 月... 令... 慶...  
義... 國... 書... 編... 等... 書... 者... 即... 是... 南... 國... 曰... 吾... 國... 無... 此... 書... 矣... 明...  
日... 白... 石... 送... 一... 小... 圖... 來... 曰... 萬... 國... 全... 圖... 在... 今... 二... 或... 有... 地... 球... 有... 極...  
極... 宿... 原... 番... 字... 其... 字... 如... 孫... 髮... 地... 及... 人... 物... 風... 俗... 土... 產... 書... 備... 焉...  
利... 山... 人... 所... 刻... 之... 福... 圖... 及... 月... 令... 慶... 義... 天... 經... 或... 同... 圖... 書... 編...  
考... 所... 載... 誤... 以... 洋... 字... 略... 記... 其... 後... 際... 而... 之... 此... 小... 圖... 吾... 長... 寄... 港...  
人... 所... 作... 其... 編... 地... 之... 法... 尤... 妙... 三... 惜... 閱... 所... 載... 地... 名... 存... 十... 一... 矣...  
今... 白... 且... 談... 以... 該... 文... 恐... 諸... 君... 不... 可... 解... 或... 侯... 對... 焉... 則... 歎... 人... 讀... 三...  
可... 也... 若... 其... 地... 球... 極... 極... 等... 字... 同... 則... 歐... 羅... 巴... 諸... 君... 所... 貴... 數... 本...  
藏... 在... 初... 府... 今... 度... 之... 力... 不... 能... 使... 諸... 公... 一... 觀... 之... 亦... 可... 以... 恨... 也...

壹千四

論孟字義

伊藤雅頌撰

和韓唱和錄卷之二 貴國伊藤子三童子向論孟  
字義等書一反程朱之道則淺解之頗僻殆有甚于  
蒙山陽明之徒未和貴國字者無非揚墨之言耶  
答鶴洲伊藤仁有之駁程朱不三童子向論孟字義  
而山而周子先於仁翁門漢人何翁合年三降  
於一且也年王白者馮真白深清園并之可謂之天征  
年三書者三身

辨道

辨名

論語徵

大學解

中庸解

學則

曰子曰齊東郭曰夫六經傳記者我道之所寓而禮義之府  
也道者安萬民之術也禮以制心義以制事夫心也者操存  
舍之出入無時無知其所歸故聖人制之以禮湯之以樂夫  
事也者一日萬幾紛々多端故制之以義知之以中夫禮  
義者聖人之所制道之權衡也或以為天理之節又人事  
之宜者此自以隱度以作為權衡者也夫禮義亦極數千  
百身之實驗端數千聖賢之智以而後成者也豈以後  
人隱度之所得而作為哉易曰形而上之謂道形而下之謂  
器道指易道而言之非去先聖王所以治天下安非氏之

共

道也即謂善之善而非氣之謂也或以為理氣者徑也夫  
形而上者一陰一陽後見其象者也形而下者正取其象  
以制善者也物之至善者辯道也二篇及論語中庸  
二解等則等諸篇以具論之善之意也

童子問

和韓華談董孔編之書之業書車係轉便洪黃諸公合為  
山志曾聞伊藤仁壽童子問成書記獲歸不知諸君亦  
見三不復海洪黃諸公為主九原成書記亦為異初董  
子向著一見而多存於強首不云觀耳

庚訓往來

童子教

大日本史

日本通鑑

日本通鑑書經國大典和字部載庚訓往來童子教  
等書目此皆卷圖策初之如六國史懷且藻經國集及  
諸矣錄律令等書皆未傳貴國邦吾邦水戶義公  
以一代雄才壯大日本史二百四十年卷但以來刊行不廣  
數人向復消卷貴國三書亦未都邦若院少日本通  
鑑卷秩頗多而近來自談所出果矣水戶廣之二百卷  
夫未刊刊行云可恨

白鹿洞書院揭示集註

山崎嘉矩

白鹿洞書院揭示集註書松上朴公有白鹿洞規集解見自卷錄今  
尚存否我聞命之注亦有此解不知尚見不復能辨白

之

庶洞集解書為有藏并者未大行于世周為之解無  
由得見以質其說可恨

精獻遺言

曰書之章書精獻遺言曾一觀否已傳貴國否復  
處聞而未見之

讀詩要領

孟子考證

曰書之章書深藏見者讀詩要領孟子考證公觀之  
台復雅軒孟子考證之末而日日在樓姑未得眼是他  
未得見之

骨度辨義

陸不辨

山田心珍批

柔翰筆熟以曰三章固由靈柩徑有骨度篇所以定命定之分  
寸也故骨度一藝而命定亦靈命定則善人也必矣然  
諸家所註異同不一於是一於此書一篇名曰骨度辨  
該非敢求其不異非伏願先生一覽之後正其所誤增其  
不足者若有所來乃疑一書於卷首則豈唯題壁句則  
有徑穴解在朕解等而未脫稿別難致居定覽可恨  
復慕在如得自暇則一覽後有身復慕益數日不見心  
以為恨惠此來臨欣喜之至所堪骨度論深得古人三肯  
可質可質俺以不才敢序心甚不安稟  
之序多謝心誠心之遂昌堪卷躍

但求大集

春書文集

內書三章問南。時空開讀但來文集但來三文字如何春書身三  
序僕友人猶垣群明所徵也又許如何復龍洞但來文  
許可謂日東巨匠而學術大德春書身及序亦可謂日  
東之巨擘矣

童子問

問後餘響和也三和伊藤冠亭龍岡靈樞不待無言通  
松塵冷見古風美字居家童子向白芒竹黃草身談  
天東僕坦伊藤故以童子問致每余筆中亦有年仁有先玉而皆陸  
主雖洵矣非聖人之道是復以坦語身或指左道或指陸王陸洵要  
不知所以謂也固求僕所

內從探賈

仙槎華談和也三章奇以款昨元年以書桐同後平內從探  
賈屬其序文初甚荒拙無以稱其想也公近見元公野  
元勤云元年身門下也老來不懈治瘵三復或拾徑語  
有若抄集句感代想而賜序言當博采身身憂聞  
商豈不三年也。崇奇一再昨攝元年所批序文以呈三  
公亦聞之耶元勤云未聞

弄道

弄道

未度身和也三往來何如觀海贈禪而似尺的確海卷公  
領亦道非不耶不觀海不消看今日想來將奉案下  
國禁不龍輒傳因人著述於海因故託呈仰他日若  
賜領收電覽則公亦忍許但來平載載一豪傑觀

五

海  
望  
師  
是  
翠  
一  
獻  
長  
危  
郭  
前  
卷  
壯  
難  
海

玉壺吟

木下希遠撰

采輯品和項麓集

瀨尾云

南草堂下

蘭皋

都什一為之玉壺吟其近作若干首是皆下里巴歌  
身敢以備毫瑤若欲每教言於卷端則何賜者之惟  
所惟新音氣復蘭僕見是下之詩矣非今世詩用諸序  
文必須精思力書以奉贊今度紛冗之際此集如書之  
言于兩卷后必欲從後書送彼言亦然未知如何  
尚送者便故云

再草

蘭皋

杜鵑序又自此至大坂之間掛出則必傳芳洲芳洲有信  
人也諸君勿各疑表三壁為感音氣又復吾正聽芳洲言  
以萬無一虛疏為言

白石詩序

新井良策撰

瑞芝軒吟稿

鳥山

日書

草蘭亭子序前

音氣

貴國讀書音歌是耳似難曉識是以諸文士偏和華談  
文雅歌然多有不可解者蓋坐於是律之未用此字中  
國未故其同音自別馬州而六集和浦儀二君子其詩

三

文固是絕才今世不可多得也見其人如聞隆音未見其  
下而先得仙人篇從驚有古調疑其曉漢音而及見其  
聽言無以信然又是宋當代之人也幸仰使行歸時  
持白石詩州一卷示余余歎其音調婉而有中華三  
寶今聞其人不出見矣以此奉拜甚恨其恨頃到  
大坂有人傳示端芝軒吟稿數卷曰身山寺所作其詩  
蘊藉有味其門生一人力請余為序不許而為序  
方今清製中文連後構必身三若亦以今起村身  
難深深和云下又何得久在人間僕所以難於為序  
為也

復青象旅榻下

蘭自年

謹志不論論深感云下為余傾心矣為石子在東都為

山草居浪華余亦未相見而其詩及恰如斗山吾輩珍  
所敬不窺知也余於詩道志必為漢魏近侍必盛  
唐且慕明玉李詩七子亦未嘗學大曆以來微西毫  
侍者所為矣元瑞曰詩歌之道一盛於漢再盛於唐  
又再盛於明余謂確論也近有一家云唐宗元白宋  
唯蘇道明世諸子無是取法聽身食言也

社律評叢

端芝軒吟稿

身山

三  
評叢曾未見得頃呈菊溪而亦未及獲閱不知是誰  
用也呈菊溪張君社律評叢公又經列覽身山詩

人所許而杜詩詩論三語不盡見而此是吾友大鶴漢翁  
所選而披索詩歸洛陽東涯寓所而先主席于卷  
首請余暫欲河見公自許不謂也今嘗獨當此地則必  
至一序在右如何請余多謝之而志尚未可知謂此公見  
其新集不謂余我之見三已有序又謂此公文章皆河如  
其高序未河見請余見何書謂此公與平田玉書也

唐物類彙集 子卷

物類彙

雜林編和集三

慈併草李東郭洪鏡湖嚴臺湖南泛史四之五

案下

去水

數地冬極寒恭惟尊候起飛萬福候事正畢回報反

御過北都獲復觀賢人之光耀矣德瞻望三誠備述  
跋沙事務日繁不當有煩聽從自揆度大方君子有或  
人之美故輒有所言不顧惟不為聽義敬邦北落如質  
我中龍登三明鎮王金沃侯小臣也侯知義有好村不  
昆共三學以命義拙次臣物類彙集一子卷皆係作微  
子華人任職中而吾國所產者九二千餘種自謂  
盡一生之精力以于草屨類罔雁石象之說新以耳目  
之親寔然後作筆也至於其見于性體而本國未  
之有者乎夫嘉禾豐州奇禽怪獸玉石珍寶車方所往  
者而不可名者則欲別恐者其事洪大亦非且所  
往為者嘉年多病奇命不可期恐有心而不能身  
三 伏惟諸先生學問之廣博文章之俊偉冠於一時而振



於東方義厚得通於下凡誠切傾倒之念是以願得買  
入三一書以壯書且取信于後世也東都並直清首身在金  
沃日為義叙此書乃萬以呈示且見其稜嶇也自政都候  
風開洋而直指對馬年于同暇一為下巨筆以叙其天  
畧託羽衣芳洲和浦霞沾未賜叙受破瓶敬寄能  
增九鼎之重也不勝願禱之至薄儀奉寄在石深愧  
難說聊表意而正心德身印土月徭義再頓

各

龍湖

雖欲副教不可等閑搆出謹為所忌而恐不敢也

各

龍湖

此書所養身仁教志耶觀息三言命意与古三琦早粗  
視類是下可謂博雅之士也所社之論不敢与素何

白

若水

所養一子卷必賜巨作勿以碎

各

若水

是下可批觀其大略即書之大家也非僕腐儒之所可  
議也但是下積此美必不行三於一固行將傳示於天  
下可贊可贊貴書之三卒業之數歲矣想必刊行於世  
一併全書可以河玩野

白

若水

叙文非居則不可也必賜巨作勿推

各

若水

叙跋之文即又人學士之所指如僕腐儒安敢一筆於  
三 大家三書乎於是下亦與先章勿推之也

曰

千萬為歌之惠美幸甚  
未鄂願之

大學新疏

空直清拙

曰書三

年朝軒國李製述書

淡新

夫觀國者於城池宮廟之壯麗風俗之繁華則未也而  
於山河之固形勝之雄亦猶未也蓋善觀國者惟於其  
賢人君子之有無何如耳其如此然後可謂善觀者矣頃  
信使回身獲一科先生之規氣識辨御李不忌喻其  
樂此惟恨方言稍異恐言不通也觀國者能之端亦議

論之宏稱乃知收代之偉人集華之文章在乎此也况同  
行之士皆彬彬乎為道德仁義之人雖足跡不能入貴  
境亦足以觀其多矣賢人君子美言惟觀山河形勝與  
宮廟城池苑囿府庫之巨盛之壯哉禮軒自知讀書不欲  
為世俗之字書師事牧野成實字養浩者受業焉又  
有室直清字師社者先師所與友也先師每稱師社  
云文學德行不漸古人乃命社幹五汝徒斯人以從業  
焉而惜勿流兵雖死無恨也遺訓存乎身身常恐有  
忝先師之命也養浩師社以明經道字聞於北湖皆  
以講伊洛之學為任不喜明儒新奇可駭之說非邦  
亦有許多異論別立門戶者師社深以為憂自疏四子  
之書以授門人為札幹輩先將大學新疏以行于世聞

三

貴國一宗程朱之學不貴異說私竊以為此疏有欲契  
大賢居乎三意也故欲一質諸君亦即記今徵在東都  
道里遠遠未遑相聞不知其意何如也然私竊身遊  
于儂僻中得自接諸先生之餘論慰新債日願見  
之意但恨一別之後相去萬里且馬牛不相及是以  
正春悲之意不能三發叙師門淵源年賦新疏疾  
伏冀達此意鏡湖龍湖泛愛三先生以致一快誠不堪  
獻芥三策道途風霜使節衝冒伏祈為國日重不  
備

芳洲謂余曰大學新疏始看了自是天下好書可珍重  
只恨韓使來行前不贈之韓人待吾國學者徒以詩  
賦而己若使此書示在東行之前則知吾國有若

新學者矣顧待馮某必不以詩人也豈可惜余卷  
三僕亦獨有此意恐觸便法意所以不果也使師  
東指之後与稻辰水議此事以与新疏一言不以涉  
因事与無所辭避為宜謀二君在甚拒受此疏得  
侍達何幸如之芳洲之得一本余亦竊欣無新本  
可贈乃敢自所批點一快哥三

東菴詩集

松井元規批

何事也

奉呈奉公學士

東菴

不隔及邦萬里賒交鄰身度世相如平身為在蓬萊島  
此日來席得望後潭府無緣聽聲漢錦旌但自仰光

五

華如何輕致登龍喜，不要瓊林一草名。

改

僕姓松井名元規字胡云，今東菴居于南都三豆山下，自早歲而頗嗜吟咏，壯身在窮僻，素乏師承。三敝雅歌，牧唱身雖雷門布鼓，而實有所愧。拙稿一快獲，未呈上伏布，一經覽了，賜以新言，何賜似三章莫新教謹啓。

奉次東菴詞伯寄韻

郭

三豆出居未竟，賒連中音，同忍相加，清新秀句，庶人韵浩蕩，師心泛容，核苦竹叢深，餘鵬雪小梅香，動報春華，白頭如髮，手金是道，道天毫夢，玉在入賞，邦之境，得与諸文，勝遊願盡，新和之樂，而往。

未得与豆下，去苦人主一面，亦有教耶，到空津，獲奉豆下惠詩，及羊稿，盤手展玩，牙頰生爽，三豆感荷，而但審豆下款，放於塵白之外，狂身人，世向消福，令人不覺，使羨未韵，謹此，以呈略，綴小序，並貴稿，附呈，領仰，幸甚，後三洋海豆下，示鳥，卧雲林，奉袂，無便，臨行，眼眼，張張，烟譜一卷。

稻義拙

同書

咏烟草贈東郭李先生

若水

不存性嗜吸烟，曾托烟譜一卷，明人諸說，陶乾，交錄，為三，以欠其壽，為振身，故附小詩，敢請，四先生，焉。

和伏希莫各室

戰時只談落瓦雨曝心遠期明月天形管莫來雲散  
片回頭自語是飛仙

和君水咏南草韻

東郭

香烟吸如消長夜紫竹極時望遠天使覺此中真味  
在採芝食藥笑群仙

咏相州贈鏡湖洪公

若水

奈苦甚清嫌性冷酒日雖美使人狂且流年似相瓦  
好一種新芽味不常

奉謝若水惠相草韻

鏡湖

非淡茶非葉梅宜吹嗜好無分聖子狂異竹危身敵  
海嶽何難漫葉不尋常

詠金線相贈龍湖嚴公

若水

萬線剪出珠金並氣味新時別雅為一吸消愁過酒  
力何論炎帝未嘗嘗

奉謝若水詞伯惠相韻

龍湖

細切輕刀萬線黃吸身長竹氣並為誰知日域情明  
在分年三鞞病客嘗

咏相草寄贈范漫南公

若水

界熟奉玉來葉使海平何如向蓬洲山人有個邊  
草一任銷世裏裏收

南公在使相前故老和春

先達遺事

福業正信拙

墨水一滴猶葉自序云年僻居江左絕人事形神寂莫身  
自不覺時為暮古作先達遺事以壽為終俗之尊  
存慨然存世之志為

文章達信錄

曰 惺惺

惺惺文集

曰書云落字蕭字欲天指句如河人共文章達信錄  
又惺惺若千卷林道春輯其遺文曰惺惺文集

惺惺集

秋雪村批

曰書云建仁寺大龍雪村年十八入道元人以為係賊押將  
斬之友梅求狗羊吏意供狀乃授之梅報以佛老所謂

乾坤無地年孤節且喜人空法亦空珍重大元三天劍電  
光影裏載春風二十八字為韻三作頌二十八首詞語正  
慈字畫榮然元人見而大奇三味去之後元欲擊日本使  
梅為前導梅不從起迂梅國蜀遂住翠微寺偏遊蜀  
中故所著集名曰惺惺集

大燈國師行狀

曰 年譜

曰書云翠野大燈國師初為寺人時居玉隆橋下有身  
矣其門徒作行狀年譜皆詳而無載性在聖子宗順作  
賢曰風吹落石無人犯身玉橋近十五年

大東世說

服部元為撰

曰書記先事而後文所以傳後世故文經世功而事三項  
項者不記而可也本國儒者以道文記後事多不為他人所賜  
故不立以傳異邦也儒者繫於是懷耻慨以圖于華然華之  
出乎奇絕者雖如其文復歸焉而足以跡勤後世者豈  
可不記之哉意幸而可也如必物度教不通異邦亦不妨為  
再准業文學高門下者當其錄本國之事以奇絕難立  
以跡勤後世而欲翻難入華人之腸者捨而載焉是正先文而  
而後事之過也服部元為未清其文最可也巧而本事  
系世語豈惟事此而已哉蓋先文而事可謂以假文辭  
而已為通乎夫誠如周公之戎執之言

今朝編年錄 早卷

羅山林子撰

今朝通鑑 言平卷

春齋林子撰

心學階梯 不記 云正保中平年

大猷公休道春先生小命 ついで 日本の文記也撰之志人  
ら行上 抄 或帝 一 下 二 年 三 年 四 年 五 年 六 年 七 年 八 年 九 年 十 年

その 一 年 二 年 三 年 四 年 五 年 六 年 七 年 八 年 九 年 十 年  
今朝編年錄 一 年 二 年 三 年 四 年 五 年 六 年 七 年 八 年 九 年 十 年

元

嚴者云その門志と後々 一 年 二 年 三 年 四 年 五 年 六 年 七 年 八 年 九 年 十 年  
その 一 年 二 年 三 年 四 年 五 年 六 年 七 年 八 年 九 年 十 年  
之の地旬十五向の場と高 一 年 二 年 三 年 四 年 五 年 六 年 七 年 八 年 九 年 十 年





義の身の新在... 今平... 知人... 報解人... 執政... 書... 社奉行... 知人...

用... 徳義... 後世... 取身... 在位... 成儀... 容...

取身... 在位... 成儀... 容... 容... 美...



七〇九

仁月一覽

望月一覽 子書 仁月 望月 十七 子書  
西本 中本 四本 五本 六本 七本 八本 九本 十本  
十一本 十二本 十三本 十四本 十五本 十六本 十七本  
十八本 十九本 二十本 二十一本 二十二本 二十三本 二十四本  
二十五本 二十六本 二十七本 二十八本 二十九本 三十本

金澤 子書 卷

望月一覽 子書 仁月 望月 十七 子書  
西本 中本 四本 五本 六本 七本 八本 九本 十本  
十一本 十二本 十三本 十四本 十五本 十六本 十七本  
十八本 十九本 二十本 二十一本 二十二本 二十三本 二十四本  
二十五本 二十六本 二十七本 二十八本 二十九本 三十本

望月一覽 子書 仁月 望月 十七 子書  
西本 中本 四本 五本 六本 七本 八本 九本 十本  
十一本 十二本 十三本 十四本 十五本 十六本 十七本  
十八本 十九本 二十本 二十一本 二十二本 二十三本 二十四本  
二十五本 二十六本 二十七本 二十八本 二十九本 三十本

金澤 子書 卷

大草和解

望月一覽 子書 仁月 望月 十七 子書

望月一覽 子書 仁月 望月 十七 子書  
西本 中本 四本 五本 六本 七本 八本 九本 十本  
十一本 十二本 十三本 十四本 十五本 十六本 十七本  
十八本 十九本 二十本 二十一本 二十二本 二十三本 二十四本  
二十五本 二十六本 二十七本 二十八本 二十九本 三十本

北賞鑑十卷

仲村欽根

望月一覽 子書 仁月 望月 十七 子書  
西本 中本 四本 五本 六本 七本 八本 九本 十本  
十一本 十二本 十三本 十四本 十五本 十六本 十七本  
十八本 十九本 二十本 二十一本 二十二本 二十三本 二十四本  
二十五本 二十六本 二十七本 二十八本 二十九本 三十本

本朝通鑑

本朝通鑑

曰書

國史雜記

孔子曰夏禮吾能言之杞不足徵也魯禮吾能言之宋不足徵也夫  
子三大聖而文獻不足則其言如此子長經夏殷之事此周秦  
則不詳者宜哉孟堅尉宗詳記一代事源壽以下歷文憲  
有徵之者也 本朝通鑑國史始於應中 天皇蓋夫上世之事  
備矣蘇氏之說曰精雅矣故舍人皇紀日本紀載四  
一氏事息際詳略相雜是不獨有不足徵之乎其後經  
良房基經時平教之所紀所錄詳而盡矣乃其有徵  
之者乎寬乎延喜以後國史家之無聞而方子亦與世

相氣所以徵之美恭惟

先大君大猷之流圖國致太平三職 命我先人羅宗  
倚今朝編身錄自神武至宇多五十九代刪故事取要  
勒焉四下卷是乎桓武末身大同仁仁天長四代更開如  
且寬乎無記大考考索時遇 國衰而國華歷成矣  
亦近矣其其不成功者指或方今

三

大正下流教消美德志述事之餘辱 命我後讀前  
錄之迹錄昌泰延喜以來之事嗚呼老事則無文獻  
三徵顧身則無良吏之才何以為家國堪重任哉苟勵精衛  
填海志唯懼有地蟬蟻樹之朝既而國危既為羽林深志者  
左拾遺河野志秋八回左拾遺越智三則和州大守源廣三  
承 台命扶伊州大守大江為庸奉行其事而以

刊野月同業 先聖殿故祠儀畫地尚南臨西新崇長  
蔡十五步以爲編修場官吏松信軍等監三使臣之方門人  
書主筆吏三年餘事以總裁之名賜月俸日支且建藏  
書庫以聚日誌造屋厨以設餘食重降 官命以  
先人所錄之文併今所欲續修者賜奉朝通鑑之名  
以臣拙才蒙此優崇肯堂之業誓古之力可謂身三幸  
也司馬居矣者希世之賢才而資治通鑑者百世之  
戒方今以是無此肩者今臣所脩同其於非無借翰之  
慮也官事無臨 敕命惟重臣何不竭精力於此  
或慮身不死而終編則官庫三能久而先人三積慶乎  
若者謂慶各有因史以夫奉敕命而始也喜以後七百  
年未三治死無廢則考此長蔡可謂國史能乎乃知官象

文德之流行以風行天下則群國傳聞也盛年而遺言  
殘篇置郵來翰聊有徵之者而編修功成則能名亦  
不虛也若夫積年成書累言成事積事累篇以成卷  
成秩屬之稿沙長爲藏一貫焉山年也則今日起事  
若也年竟意之端乎年預事群事難海易不事  
積小以爲大者此三謂之寬文四年壬辰十一月朔旦  
日書

新寫奉朝通鑑跋

奉朝通鑑之書寬文年中編輯終功錄上諸官府又寫  
一部藏于日光其年本一節必於林氏許延至年中  
政府會議欲錄梓有故而未果元祿年中今津中將  
奏請借林氏本寬文三年不能容易見之者可知矣

乙巳之年予亦奏請借林氏本寬三公務之暇至中申之  
年而身予極是年世一更也若不勝字而有此也之失則  
雖魂附不及身於是甲寅之夏奏請可馬林氏本寬之事有  
命肯之乃使家臣教人騰馬及今年修馬成矣可謂  
吾家之幸也又按吾家之室不志德初三子眾共見之者是  
予之所欲也若有親切之傳寫之者予奏之借我本正又  
予之所欲也然則此學本於天下徵於後世者予庶幾  
焉寬存元年辛酉春二月執政拾遺淳年三歲  
此本在江平古新皇庚戌也

大明律說解

柳原玄輔撰

傳記集新刊之神原玄輔年希、湖泉州人其先伊賀州

下山氏也幼為外父所養因冒柳原白初游學京師受  
業錦里門人指教年隨外父而養始見木先生於都下  
為先生所喜稱未幾心南落所其學博綜旁通運曆  
五行數術之說以經濟自任嘗蒙府命以撰大明律說  
解其他著作甚多其家錄室永初春二月年五十一而沒

與起漫草

南部景衡撰

曰書之南部景衡字思聰長壽人本姓小野少孤為業師  
南部子奇所子奇因冒平姓蓋南部子越之長尾氏族也  
云云學詩於國人崇公濟杭人謝叔且為二子所稱焉及子  
壽心景庚三聘於越中因命從學於三首卷先生學既通

而東子詩既沒菅原命嗣其後去萬千乘武修等子祀  
事恭預先生以先生年安先生同季故也居三年菅原厚  
召乃還正德五年春三月卒於越中享年五十九為人溫  
恭篤謹精通經史文材富瞻身既多病自撰詩六百  
九十四首又四十四篇曰與起漫草有子三人皆有材名  
相次而記其長則國華也

題詞

藤原隆信批

近遠隨筆入口不乾詞のりき自注藤原隆信作

鴉鷺初語

一筆輝肉批

口書不鴉鷺初語のりき自注一筆輝肉作

二書一卷

口書三半時卷淡のりき二書一卷のりき門人傳授大初  
口書不鴉鷺初語のりき二書一卷のりき若未不鴉鷺  
口書不鴉鷺初語のりき二書一卷のりき若未不鴉鷺  
口書不鴉鷺初語のりき二書一卷のりき若未不鴉鷺  
口書不鴉鷺初語のりき二書一卷のりき若未不鴉鷺  
口書不鴉鷺初語のりき二書一卷のりき若未不鴉鷺  
口書不鴉鷺初語のりき二書一卷のりき若未不鴉鷺  
口書不鴉鷺初語のりき二書一卷のりき若未不鴉鷺  
口書不鴉鷺初語のりき二書一卷のりき若未不鴉鷺  
口書不鴉鷺初語のりき二書一卷のりき若未不鴉鷺

長明齋心集

口書長明の齋心集のりき二書一卷のりき若未不鴉鷺  
口書長明の齋心集のりき二書一卷のりき若未不鴉鷺  
口書長明の齋心集のりき二書一卷のりき若未不鴉鷺  
口書長明の齋心集のりき二書一卷のりき若未不鴉鷺  
口書長明の齋心集のりき二書一卷のりき若未不鴉鷺  
口書長明の齋心集のりき二書一卷のりき若未不鴉鷺  
口書長明の齋心集のりき二書一卷のりき若未不鴉鷺  
口書長明の齋心集のりき二書一卷のりき若未不鴉鷺  
口書長明の齋心集のりき二書一卷のりき若未不鴉鷺  
口書長明の齋心集のりき二書一卷のりき若未不鴉鷺

三  
三

増補道世の事...  
の事

山田...  
彼云...  
行中...  
續...  
今...  
續...  
明...

野牙腕

有房口撰

日書...  
都土庄

都土庄

繪宗久撰

日書...  
歌見...  
三十二人

三十二人

日書...  
三十二人...  
三十二人...  
三十二人...  
三十二人...



年名

年道

年則

清詩選選三級食序三神邦美三子於菽老有可竊也者二為其所  
著亦必年道學則等書論上下千石載之學未嘗一言  
及納蘭氏德程解

類相集

聖書子拙

社三楊詒文集楊社三邦美三子於菽老有可竊也者二為其所  
能屬詒又所著類相集行于世惜年人已琴存寥寥  
乎無復聞矣

徒出等

奉白集

口書序云我東人假字寫字陽者徒然州為其最而  
奉白集殿之皆以流語視年為益年一而潤益之未嘗  
聞非為高者也

烈士報讐錄

三宅御明拙

玩齋集後編邦美三美齋讀定禱士烈士報讐錄年六月各者  
心傳而潮田介事跡察年無間今也幸得真為人是不可以  
不傳焉於此年玩其美以御前史之例

節用集

五升禪床拙

口書五升禪床書書有材學位尊長親玉得筆法乃若節

用集一部又自書行於世

晚景集

梁田邦美批

曰書其於文章初而游同為業後而困甚年衣食不濟  
悅為下惟握管詠咏有韻三文有時而作若論序則  
從矣及入指唯日夕執經無任義三務恬無定事又  
狗俸蠲金以購書雖錢編冊固不足賞也而較諸前  
日空虛不為不為矣於是乎讀而思之而華詠咏三子論  
序日新又日新而不懈焉乃輯拙稿為八卷命之曰晚  
景集會東郡初益桂公賜三序遂上梓不為至思態  
淫之所致非正之所得而杜也

東郭集

曰書

復源子行

披微捧誦未畢而知吳下江東人又為僕曰識法霖師之  
族弟也武昌固壽疆之玉矣而霖公於莫逆焉身一而為  
念昔時社中事宛如昨日敢不悵然承東郭集既成屬  
僕序方今奎祥徧昭世不為人矧又蘭薄三序得張三  
無必有是氣相心者矣而年研崇禮眷以年命僕何  
指豈非霖公文章三靈投豆下以不朽寺諸梓且屬僕  
序欲了三三之緣也雖然物為之業幾八十三爾備日喜不  
能快揮如椽以廁於鄒枚之末焉今既集目諸梓志  
備端必玉指鵲金至中而冕焉以瓦石可乎既令霖

四

公為存德薄再四亦不敢決矣然亮是希賢處子  
豈有詩是既兼高賤息負則須南軒述可謂以慧我  
窮此窮於化為隆彼薄不爵於不始良可報云父  
子各味存原韻答謝

再復源子行

美所以不肯作東郭集序者止此為以差夫無能為也  
前客既悉矣今復何言然審再喻若曰美難下為不  
足與共言陽避讓而陰忌辟為者不知何以致斯嫌也夫  
避讓禮之質士居子之庸行也美云惟大夫友天下之士  
其心狀屬毫無挾匿彼賢邪則危而象之不賢邪則謗  
而翼三胡以忌辟如女兒為度立下不敢遂信以揣摩人  
腹中真矣欲使美不得分疏其嫌乃肯作序而不辭焉

嚴美性率直若恆與人交凡事可談即談否則止不苟  
曲正以矯人不他意焉且下各一談哉顧古今文集序者  
所以作之道四高師命才子才子請師也朋友知三相  
屬也末相識而杜高必以定價也大抵不出三四者今為  
且下於美非有丞丈之親新金三契而一旦平尔求我亦  
唯立景我之圖嬰錄我錦繡珠璣我態所再措是  
何可者也是何可也所以不敢談以此世有真為人揆詞  
深得一小類輒不同其可必飲世搦管者在青於子才則  
可美非為之矣誰知執物之意不別盛意再志焉幸

在國集

四

改在國集

德園集序卷 淳和帝天長初 初中納言良率安世  
宋宮學士滋野貞主等所撰美言聞其久未見其書永  
州界府盛人竹田雄子家有二卷相傳祖先所藏僅  
存時冊三其書字多脫或不可句請美校訂因竊謂  
大司近今碩彦識文粹懷良等諸集且為詩禱而  
俗文驟而弱東習攸董不且觀也其然其然難能仁之乎  
之乎世運相干涉一代復一代不必保其才不才也久矣異  
域且然况於本邦乎抑千歲之下使人景仰贊美不  
可念者在於 先王為左文之治而已止論博上家公卿  
臣下百官頗通經史議判表疏各修辭而不修故朝  
廷以道中知之者得焉不從遂道乎竟乎必其間有管  
江二名公出而後文教布乎海內矣蓋亦 聖德二風也

或惜夫能處兼柄之難易端一以口操之既為本事者  
若目不識丁字筆畫乎三家村之紙無以異也方今奎  
光燦然 霸政文明大德至盛王大夫深荷詩書者稍  
稍見矣所憾經濟之權獨為一得武人俗吏雜儒有  
明術通用其善可以為室者亦唯掌故說書之務不  
先与方技同伍焉尔當是時焉得從國大業不朽盛  
事奉 教輯錄能述其人果若茲編乎嗟乎書為  
生即不肯曉然有感乎斯則投筆而起挽五石舟  
夫八可也何以重雪焉

序玉集二卷  
坑後集前編卷  
月 後編卷

卷之三

梁田邦天撰

坑嶽府君行述梁田三府君年景靈詩邦天初詩邦天  
 庭于武州嘗讀明鑑志覽武夫山中撫骨嶽石室前有  
 仙坑函以武州竊撰武夫因自号坑志隱姓梁田氏祖  
 嘗居下毛州梁田村遂乃代因地為武三府君小字新之  
 生九歲從父大槁生受讀孝經小學十一歲啟蒙為儒  
 生更稱元叔同仲父教為先生為大夫人見鶴山先生門人  
 元祿辛未府君年十歲以儒維于北雄鎮長三年禮侍  
 稍衰輒致為臣去未娶梅才在書門中仲父教為先生  
 但講書都下以束脩為居丁丑年身加納原所歸以文  
 學備顧問得月奉三千石遂居如加納室永而受謝病

四

而三府君少時作文不過心一時之請非有意為文者文若  
 詩或罹災或危人採去脫稿即散失故亦不以前諸作存  
 者十三為晚節益不事纂述恒言世儒有作焉於道無  
 可尊於文無可觀書怡然放務坊間以某先生著大書  
 釣名偷譽以求售者有道士取之余亦恥之竟任身不  
 首輯錄府君之文或編乃圖校刻刻可以公於四方故  
 告府君府君不肯曰凡物罕則貴珍則賤卿世景星  
 以辰夕孰仰之蘭時往苑遠集三稜都天香近三獻心  
 廷焉而况茲御于苟一出則流臭於海內不加藏遠  
 尚遺諸世仍三請句後徐曰意聞過情君予知三觀  
 茲編者是其是非非瑕瑜不為相掩事錄以敏三  
 末圖以是三能使我情暴于一方則乘我者知我也

何向是價損不損聽汝請亦無不可也文集於是乎始上  
梓覽然三三冬請老被髮得玩孫食文籍之極暇則  
或能句盡無曰少予語人其角風雪等文深猶崔家三  
語蓋有韻固雅之猶有不可象三景情而語乃不聖  
能詩俗于雅轉屬于新亦一種且流可謂至辟玉三餘  
新或府居歿後彙其和歌語句及和文語文為二卷  
顏曰片玉集亦是府居文氣之偉新也府居竟大十二  
年壬子二月廿四日時出於武州江戶神田室曆七年  
丁丑七月十七日而時年於本志亦不南野得壽八十有  
二年中莊本多寺先儒人之非左法蓋曰神月菴廓  
然說藏所著說藏集前後編十二卷各同書三卷行  
於世流瑞人

口傳抄

雜事抄

深窓初抄

房通公家集抄

永廣御家集抄

拾林抄

琴韻抄

中翁隨筆後集三傳抄雜事抄作忘初抄亦  
之如心今之於其の事業了了之書曰  
之の一人の中一傳抄以下物長抄等  
書六本日乃公所為其文流第の衣文  
お加へて一院一及一汗卷一  
四



桂葉記

日書三日月抄並并義和歌の真門人書一した書  
書不門書の題を... 書不桂葉江... 何の桂葉記... 日書

老運合

日書三日月抄... 新中岡合

新中岡合

日書三日月抄... 新中岡合

日書三日月抄... 新中岡合

日書三日月抄... 新中岡合

日書三日月抄... 新中岡合

日書三日月抄... 新中岡合

南海治記

日書三日月抄... 南海治記... 日書三日月抄... 南海治記

日書三日月抄... 南海治記... 日書三日月抄... 南海治記

日書三日月抄... 南海治記... 日書三日月抄... 南海治記

四



漢書の如く、西の漢書は、清人の如く、

中國太平記

日本書紀中、太平記と書し、毛利貞元、元祿元年、  
其外、茅川、若川、寺川、中津、下津、上津、書の中、  
金部、非、下、世、餘、之、中、作、名、所、人、の、作、事、好、  
其、事、書、し、く、作、名、の、必、記、し、く、  
出、た、也、大、久、保、氏、の、事、也、  
室町殿日記

楢村長教撰

日本書紀、室町殿日記、年、之、如、楢村長教撰、下、松流、  
殿、以来、之、元、源、流、殿、也、其、書、時、代、也、之、如、松流、

本年啓蒙

小仲蘭山撰

本年啓蒙、及、疏、此、序、源、和、蘭山、初、精、於、物、産、其、學、令、  
并、華、美、達、觀、上、下、其、辨、物、也、引、證、萬、有、五、入、徑、史、百、子、  
其所稱、說、皆、可、採、而、可、法、余、甚、歎、慕、之、初、編、者、著、本、年、  
啓蒙、行、于世

日本書紀通鑑 三才卷

谷川七清撰

傳訓、某、谷川、七清、元、予、以、予、小、日本、書、紀、通、鑑、之、著、述、一、年、  
及、其、如、月、也、其、美、之、如、也、  
書、之、如、也

新撰字鏡



大坪慶秀抄

日軍馬方百首の大坪武郡大坪慶秀の歌詠之慶秀娘  
の事（在り）村上集（在り）故有之常陸正原馬小住之男子の  
生も別在之（在り）一馬路除三郎慶秀より小慶秀  
本七信深之河より一多事殿の師より一高藤  
目藤馬也とい傳授事馬喜塔院之馬路除三郎より  
の付下付の者一馬路除三郎より一高藤上  
は事見之信之永福の比三河七國寄の内大坪より  
歟不存之大坪武郡大坪慶秀より一故有之の事  
道禪より一貞天より一慶秀より一子一慶秀より一  
不事より一書詠より  
平達藤九郎盛長抄記

尚

日軍盛長抄記作者不詳鎌倉盛長の事不詳書者三故世上  
に流布し抄不後人傳作し後寺不傳人なるもの

扶桑見聞抄記

源慶不詳抄

尚

日軍見聞抄記源不詳作二階堂や無二河郡豊後  
守より之浪人より源不詳より之浪人より之不詳  
月と衛守より國田將監より之

諫徽記

加藤安作

徽

日軍諫徽記加藤安作此者水野監物初七之後浪  
人安仁の子房より門外藤堂より之浪人

傳卷抄

咒

朝倉景衡

日書不歸存抄の初巻に自註云朝倉景衡の書門 日下奇景衡  
著

太平記評判

日書太平記評判の邦和宗三の著の書不傳へしと  
宗三の加算の書の法華法印と云ふ傳へたる法印  
又天徳新之由水井内山小宗也と云ふと云ふ  
傳へたる天徳の事多河内傳へる傳へる昔世の  
至る事一介の板行の事分る人此の責を以

名人雜話

江村

日書名人雜話の書は江村壽翁の著其書は一人の  
談ひ其子の記したる之書之初の語と業と其始と  
其後其後其子に傳へる其美作も其子に傳へる  
其美作院法皇の事不傳へる其美作院の事六月  
没行身百歳







